

『摩訶止観』における十境の形成

——陰入界境を中心として——

大 野 栄 人

一 問題の所在

智顗は『摩訶止観』において、円頓止観すなわち正修観法として十乗観法を成立させた。しかし十乗観法には一定の対境、すなわち観境を必要とする。観境として、陰入界境・煩悩境・病患境・業相境・魔事境・禅定境・諸見境・増上慢境・二乗境・菩薩境の十境を設定した。なぜこの十種を観境として設定しなければならなかったのか。十境を形成する課程と必然性を、智顗の著述中に究明していきたい。本論においては、まず第一の陰入界境の成立課程を考察していくことにしたい。

二 陰入界に対する智顗の諸見解

智顗は『摩訶止観』以前において、陰入界をいかに把えたのかについて究明していく。『法界次第初門』巻上之上には、

五陰・十二入・十八界の一一について、具体的に智顗の見解が述べられている。まず五陰について、

五陰を辨ぜば、惑者は名に迷うこと偏に重きを以ての故に、大聖の教門、名を開き則ち四心となす。色に對して合して五となす。……陰は陰覆を以て義となす。能く出世真明の慧を覆いて、生死を増長し、集散絶えず。故に通じて名づけて陰となす。

とあり、惑う者は心に迷うことが重く、心を陰覆し、仏智を覆い、生死輪廻を増長し、心は常に対象に向つて集散をくり返すという。五陰の^①一々について、色陰とは、「有形質礙の法」であるとして、四大・五根・五塵（^②境）の十四種をあげる。受陰とは、「所縁を領納す」とし、対象を受け入れることをいう。「六触の因縁によつて六受を生ず」とし、六受には「苦受・樂受と不苦受・不樂受の異なりあり」という。想陰とは、「能く所領の縁相を取る」ことで、「所領の六塵の相を取るを六想となす」とある。行陰とは、「造作の心は能く

果に趣く」と、心がつくられ、対象物に判断を下す働きをいう。識陰とは、「所縁の境を了別する」ことで、六識のことであるという。

つぎに、十二入について、「色を開いて十となし、心は但だ二となし、合して十二となす」とあり、六根・六塵のことをいう。入について、「入は渉入を以て義となす」とし、

根塵相對するが如きは、則ち識の生ずること有り。識は根塵に依る。仍ち能入となす。根塵は即ち所入なり。今この十二は所入に従つて名を受く。³

と述べ、六根と六塵の相對によつて識が生ずる。十二入は根塵を受け入れることに名づけたものであるという。六根を内の六入であるとし、「根は能生を以て義となす」と述べ、五根の一々は、「四大造の色」であるとし、「十色の共成・所成」として、四大・四微・身根微・各根微をあげている。意根について、「心が一切法に對するに、即ち能知法の用あり」とし、心は対象物をよく知ろうとする働きがあるという。六塵を外の六入となし、「識の遊渉する所」であるという。塵とは、「染汚を以て義となす。能く情識を染汚するを以ての故に」とある。色入とは、「一切の眼に對する所見の色」であるとして、二種の色があるという。正報可見の色として衆生の身色と、依報可見の色として外の無知色、すなわち青・黄・赤・白・黒の色などを分別する。以下、声・香・味・触

入についても、正報色処と依報色処に分けて論ずる。法入とは、「一切の意に對する所知の法」であるとし、法に二種ありとして、心法と非心法とに分ける。

さらに、十八界について、「色を開いて十となし、名を離して八となし、合して十八界となす」と、十八界は、心と有形質礙の法に迷うので設けられたものである。内の六根界も、外の六塵界も、修行しようとする人を、推折したり、謬りなく、十六知見の妄計に滯らせないためのものである。六識界とは、「若し根塵相對すれば、即ち識の生ずること有り。識は識別を以て義となす」とし、「識は根に依つて能く塵を別つ」とあり、根によつて塵が生ずるとし、「若し識は縁より生ずるとせば、豈に神ありと計して、知をして謬取せしめんや」と、識は縁より生じたものであることを説く。

さて、智顗は具体的に陰入界をどのように把握していったのか。智顗の著述に基づいて考察することにした。陰入界について説示されているのは、『次第禪門』『六妙法門』『四念処』『小止観』などにおいてである。これらの中において、智顗はいかに陰入界を把握していくのか。項目別に究明していくことにしたい。すなわち、(一)陰入界の生起・苦、(二)陰入界は縁より生じたもので無自性なり、(三)四陰・六根の対治、(四)五陰の種々相、(五)陰入界は心の作なり、の五項目に分けて論ずることにした。

まず第一の陰入界の生起・苦について、『次第禪門』卷第三上の法縁の慈には、

欲界未到静定の心中において、忽然として自から一切の内外に但だ陰入の法有り。……但だ五陰のみ有り。

と、陰入の法が忽然と生起することを明かす。『四念処』卷第一には、

若し心に迷うて色に迷わざれば則ち数を五陰となす。若し色に迷うて心に迷わざれば則ち数を十二入となす。若し俱に迷うる者は則ち数を十八界となす。

とあり、心に迷うことを五陰といい、色に迷うことを十二入といい、俱に迷うことを十八界なりという。『次第禪門』卷第十の八背捨には、「非想の中には鹿の煩惱無しと雖ども、而も四陰二入三界十種の細心数の法を具足す」と、非想中にも陰入界の細心数の法を具足するという。『次第禪門』卷第八の定支には、

塵に対する時は、則ち情に依つて識を以て五色の因縁を知る。則ち意識を生ず。塵謝する時は、則ち識は五臓に帰る。一期の果報四大五陰十二入十八界具足成就す。

と、識が五臓に帰ることによつて、一期の果報としての陰入界ができ上ることを明かす。陰入界と五臓の關係について、『次第禪門』卷第八の内世間には、

若し四大五陰十二入十八界……悉く人身の内なり。即ち四大なり

『摩訶止観』における十境の形成（大野）

と知る。……若し五陰の名を聞くも、尋ねるに即ち身の五臓に對すと覺知す。色は肝に對し、識は脾に對し、想は心に對し、受は腎に對し、行は肺に對す。……若し十二入十八界を聞いても亦た復た即ち内の五臓に對すと知る。……五識を悉く意入界となし、外の五塵内の法塵を以て法入界となす。……意識界とは、初めて五識を生ずるを根となし、外の法塵に對して、即ち意識を生ずるを意識界と名づく。

とあり、陰入界はすべて人身の内、四大であるという。意識を生ずるのは、身の五臓がもととなっている。さらに、『次第禪門』卷第四の陰界入魔には、陰界入や名色は衆生を拘束し、善根の功德智慧を覆うので魔なりという。『次第禪門』卷第五の禪を發する因縁には、

二には色界の五陰が欲界の身中に住在するに、龜細相違するが故に掉動八触等の事有り。譬えば世人の憂愁煩惱して内に結滯を起し、雍塞して通ぜず。四大に諸の熱惱を受けしめ、心従り而も生じて乃至病を得、死に至るまで外従り來り、而も苦有るに非ざるが如し。

と、色界の五陰が欲界の身中に在れば、人をして憂愁煩惱させ苦の連続をくり返す。しかも苦は實在するわけでない。『六妙法門』第六通別六妙門には、「三事和尚するを陰界入と名づく。陰界入とは、即ち是れ苦なり」とし、第七旋転六妙門には、陰入界を世間苦樂の果であるという。また、『四

念処』巻第一には、『中論』を引用し、像法中の人は機根が鈍く、陰入界の決定相を求め、文字に執着して仏意を知らな
いといひ、色に淨倒、受に楽倒を、想・行に我倒を、心に常
倒の四倒を起こすという。

第二に陰入界は縁より生じたもので無自性なりとして、

『次第禪門』巻第九の十想には、

復た次に五陰十二入十八界の中の諸法は縁従り生ずれば、則ち自
性無きが故に。若し陰に即し陰を離れては、更に我等の十六知見
を求むるに皆な不可得なり。

と述べる。同様な説示は、『四念処』巻第一にも、「当に知る
べし。五陰十二入十八界皆な不可説なり」とあり、『次第禪
門』巻第四にも五陰十二入十八界の從因縁生・無自性を説示
する。さらに、『次第禪門』巻第三上の体真止には、

過去所起の一切の煩惱業行を因となし、現在に父母の身分を攪る
を縁となし、因縁和合すれば則ち果報有り。果報有るが故に、則
ち陰入界等の一切の諸法有るが如きは、此の業は是れ何れの法
か。而も能く果報をなすに、陰入等を因と作すとなせん。

と、本来、陰入界は空寂であるが、過去につくった煩惱の業
行が因となり、身をもったことが縁となつて、果報として陰
入界を存在させることになるという。また、『六妙法門』お
よび『次第禪門』巻第七の十六特勝には、陰入界を虚誑にし
て不実なりと説く。『六妙法門』第七旋転六妙門および『次

第禪門』巻第六の法縁には、陰入界ともに空であるが、衆生
は一心に楽を求めたり、種々に横計して、諸法に執着するの
で、陰入界を實在化させるという。

第三に四陰・六根の対治についてであるが、まず四陰の対
治について、『次第禪門』巻第六の破空処には、「四陰和合の
故に此の定有れば、実無きことを思ふべし。別観とは、此の
八法を用いて、前の四は対治して四陰の事を観ず」とし、具
体的に、病は受を、癰は想を、瘡は行を、刺は識を対治す
とし、また、無常は識を、苦は受を、空は想を、無我は行陰
を観ずという。また、六根の対治について、『小止観』第二
明歴縁対境修止観の六根門中修止観には、

一に眼に色を見る時に止を修するとは、色を見る時に随つて、水
中の月の如く定実有ること無し。若し順情の色を見るも貪愛を起
さず。若し違情の色を見るも瞋悩を起さず。若し非違・非順の色
を見るも、無明及び諸の乱想を起さず。是を止を修すと名づく。
云何んが眼に色を見る時、観を修すと名づくるや。応に是の念を
作すべし。見る所有るに随つて即ち相空寂なり。所以は何かん。
彼の根塵、空明の中に於て各見る所無く亦た分別無し。和合の因
縁は眼識を出生す。次に意識が生ずるに即ち能く種々の諸色を分
別す。此に因つて則ち一切の煩惱善惡等の法有り。即ち当に反つ
て色を念ずるの心を観ずべし。相貌を見ず。当に知るべし。見る
者及び一切の法は、畢竟して空寂なり。是を観を修すとす。

と、六根中の眼根を止と観によって対治する。すなわち、眼が色をみるに、水中の月のように定実はない。これを止という。また見るところもその相は空寂である。因縁が和合することによって眼識が生じ、次に意識が生ずる。この意識が種々の諸色を分別する。これによって、一切の煩惱や善惡等の法を生起させる。見る者も一切の法は空寂であることを観という。以下、耳鼻舌身意についても同様に説示される。

第四に五陰の種々相について、『四念処』巻第二には、五陰を十二因縁に充當させ、五陰の諸行を善惡の五陰、識より受までを果報無記の五陰、愛取を煩惱の五陰、有を善惡の五陰、未來の生死を果報無記の五陰であると説くも、何れも如幻如化なりという²³。これは『摩訶止観』巻五上に繼承される。

第五に五陰は心によって作られるとして、『四念処』巻第四には、

若し爾らざれば、無明は法性を覆い、十法界五陰を出で、重ねて迷ひ積沓す。若し能く起悟すれば、二乗の五陰乃至仏の陰を起こす。華嚴に云く、「心は工画師の如く、種々の五陰を造る。一切世間の中に心に由って造らざる無し」と。諸陰は只だ心の作のみ。無明の心を観ずるに畢竟して所有無し。而も能く十界は諸陰を出す。此れ即ち不思議なり²⁴。

と、五陰は心によって作られたものであるといい、『六十華

『摩訶止観』における十境の形成（大野）

厳經』巻第十の三無差別の文を引く。これは、『法華玄義』巻第二上および『摩訶止観』巻第五上などに繼承される。

三 『摩訶止観』所説の陰入界境

さて、『摩訶止観』巻第五上において、正修止観が説示される。まず、止観を説く意義について、

行解すでに動むれば、三障四魔紛然として競い起り、昏を重ね散を巨いにし、定明を翳動す。随うべからず、畏るべからず。これに随わば人を將いて惡道に向かい、これを畏るれば正法を修することを妨ぐ。当に観を以て昏を觀じ、昏に即して而も明らかにし、止を以て散を止め、散に即して而も寂ならしむべし²⁵。

とあり、三障四魔におおわれた己身を、本来の自己に向かわせるために止観を修することを明示する。さらに、止観を開いて十となすといひ、まず第一に陰入界を設定する。陰入界を最初に設定したことについて、二義ありとして、

一には現前、二には經に依る。大品に云く、「声聞の人は、四念処に依つて道を行ず。菩薩は初めに色を觀ず。乃至一切種智なり」と。章々皆な爾り。故に經に違わず。また行人、身を受くるに、誰か陰入ならずして重担現前せん。この故に初めに觀するなり。後に異相を發すれば、別に次をなすのみ²⁶。

と、『大品般若經』を根拠として、五陰は四大と合して身を受け、陰入そのものの自己が現実様態として現前している。

『摩訶止観』における十境の形成（大野）

故に第一の観境とすべきことを述べる。さらに、

此の十種の境は、始め凡夫の正報より終り聖人の方便に至る。陰入の一境は、常に自から現前し、若しは発するも発せざるも、恒に観をなすことを得。余の九境は、発すれば観をなすべし。発せずんば何ぞ観するところあらん。⁽³⁾

とあり、陰入界は常に現前しているの、発ろうが発るまいが日常において観境となすべしという。しかし、五陰について、

不思議の境智は陰に即してこれ観なり。亦た分別すべし。不善無記の陰はこれ境なり。善の五陰はこれ観なり。観すでに純熟すれば悪と無記なく、ただ善陰のみあり。善の陰は転じて方便の陰となり、方便の陰は転じて無漏の陰となり、無漏の陰は転じて法性の陰となる。無等等の陰というなり。豈に陰の外に別に観あるにあらずや。⁽³⁾

と、五陰を観境とするならば、本来、否定さるべき五陰は、転じて法性・無等等の陰となることを説示する。さらに、陰入界について、

若し心に迷う者には、心を開いて四陰となし色を一陰となす。若し色に迷う者には、色を開いて十八及び一入の少分となし、心を一の意入及び法入の少分となす。若し俱に迷う者には、開いて十八界となすなり。⁽³⁾

と、先の『法界次第初門』卷上之上、⁽¹⁷⁾『四念処』卷第一⁽³⁸⁾に基づき説示されている。また、五陰として九種をあげ、「是の

如きの種々は源と心より出ず⁽³⁹⁾」と述べ、一切の五陰はすべて心によって造られたものであるという。それを『六十華嚴經』卷第十の夜摩天宮菩薩説偈品の「心は工画師の如く、種種の五陰を画く⁽⁴⁰⁾」と、心仏及び衆生の三無差別の文を根拠として論証する。⁽⁴¹⁾さらに、「界内外の一切の陰入は皆な心に由つて起る⁽⁴²⁾」とか、「心はこれ惑の本なり⁽⁴³⁾」という。さらに、今まさに丈を去って尺に就き、尺を去って寸に就き、色等の四陰を置いて、但だ識陰を観すべし。識陰とは心これなり。⁽⁴⁴⁾

と述べ、『摩訶止観』においては、十二入・十八界を置いて、五陰を選び、この五陰の中でも識陰を選択して、観境と定むべしというのである。このことを、『法華玄義』卷第二上の心仏及び衆生の三法妙を積するところに、

但だ衆生法は太だ広く、仏法は太だ高し。初学に於て難しとなす。然るに心仏及び衆生、是の三は差別無ければ、但だ自から己心を観ずるを則ち易しとなす。⁽⁴⁵⁾

と、まず己心すなわち識陰を観境とすべきことの必要性を説示する。

四 結 語

以上、資料を中心に考察したように、陰入界は心・色に迷うことによって忽然と生起し、無自覚に生きるならば、いつの間にか一期の果報によって、己心を陰入界そのものの存在

として位置づけてしまうことになる。陰入界に固定された己心は、心を拘束し、善根の功德智慧を陰覆して魔と變化する。それによって己心は、憂愁煩惱の在り方をし苦悩の連続をくり返すことになる。ひいては正見はおおい陰されて四倒を生ずる。本来、陰入界は空寂であるが、過去の煩惱に基づく業行が因となり、身をもつことが縁となつて、陰入界をつくる。陰入界は、元来、縁より生じたものであつて、無自性を本質とするのである。本来、無自性であるのに、陰入界を實在化させているので、対治法を説示する。『次第禪門』では五陰の対治が説かれ、さらに『小止観』に継承される。『小止観』では、六根を対境として、止・観によって対治することを明示する。

さて、『摩訶止観』においては、『小止観』所説を受け継ぎ、それを展開させて、十境の体系を組織づけ、その第一に陰入境界を設定した。智顗はその設定理由として、陰入界は己心の日常性の中に現前し、我々はひと時も陰入界を脱することのできない状況下におかれている。まず何よりも己心を、この陰入界から脱せさせることが最も重要な問題として扱えたのである。理想世界は我々の生きる現実世界を離れてありえないとする智顗の思索が、陰入界を十境中の第一に設定するところに顯著に表明されている。

とくに『次第禪門』中に、陰入界について詳説されてい

る。インド伝来の種々の禅法や禅観も、窮極的には陰入界から派生する心の対治を目的としているので、当然のことと首肯される。『次第禪門』所説の陰入界は、『六妙法門』に継承され、さらに『四念処』へと展開し、『小止観』において、止・観による六根の対治法へと発展させていった。それが最終的に、『摩訶止観』の十境の第一陰入境界として体系づけがなされたのである。智顗自からの長い年月の思索と修禪・止観によって、はじめて十境の第一陰入境界が成立したことを窺うことができるのである。

- 1 T 四六八以下省略・六六七b―c。『四念処』卷第一(五五八a)にも説示され、『摩訶止観』卷第五上(五一c)にも継承される。2 六六五c 3 六六五c―六六六b 4 六六五c 5 六六六b―c 6 四九五b 7 五五八a 8 五四三a 9 五三二b 10 五三三a 11 五〇六c 12 五一〇c 13 五五二b 14 五五三a 15 五五八a 16 五三九b 17 五五五c 18 五〇三b 19 四九二c 20 五四九b 21 五二八c 22 五五三c 23 五一八a 24 五二二a―b 25 四六八b―c 26 五五六c 27 五二a 28 五七九a 29 T 九・四六五c 30 T 三三・六九六a 31 五二a 32 四九a 33 四九b 34 四九c 35 五一b 36 五一c 37 六六五b―六六六c 38 五五八a 39 五二a 40 T 九・四六五c 41 五二a 42 五二a 43 五二a―b 44 T 三三・六九六a
- △キーワード▽ 『摩訶止観』、陰入境界
(愛知学院大学助教授)